

□ ■ INDEX □ ■

- 1 ああ！ナンセンス
- 2 高橋弘のモルモン人物伝 (11)
荒くれ男“ビル”こと、ビル・ヒックマン (1)
- 3 リアホナを斬る (第13回) 木塚灯八
2007年7月号 大管長会メッセージ「隠れたくさびの危険性」
- 4 思い出す 私と勇気と真実の会 (3) るう
スキャンダル？
- 5 おしらせ

■ ああ！ナンセンス

「若人の強さのために一神への務めを果たす」と言う冊子がモルモン教団の公式サイトにアップされている。時間のあるかたは一読されると良い。とってもナンセンスで面白い。マンネリお笑い番組を見るよりもよっぽど楽しめる。いちいち取り上げてコメントしても良いのだが、紙面に限りありなので、一箇所気になったところを上げたい。

仕事を選択することに関してである。

『仕事を探すとき、日曜日には教会に行くので仕事できないと言うことを雇用主になるかもしれない人に話しなさい。多くの雇用主はそうした強い信仰を持つ従業員を大切に思って採用されるだろう』

とあった。

断言するが、こと日本に関してはそんな雇用主は少ない。むしろ皆無だろう。論理的に考えてみるがよい。雇用主が個々人の信仰心、信条、信念を採用基準にしていたとして、そのせいで仕事に対応できない人間を選ぶだろうか？同様の確信を持って、柔軟に業務に対応する人物を躊躇なく採用するだろう。経済活動の常識である。

数年前、モルモン教徒の恋人を持っていた方と話しをする機会があった。その彼氏は熱心なモルモン教徒だったが、無職であった。元々はグラフィックデザイナーとして勤務していたとのこと。締め切り納期に追われる過酷な仕事で、土日はおろか昼夜区別さえない生活をしてきた。教会にちゃんと出席して、責任も果たしたいと、好条件の勤務先を求めて退職したのだった。

日曜の休みは必須。土曜も休みたい。教会の責任のために夕方からは時間があく方が良い。献金をしないといけないので、最低でも給料は35万円以上などを条件としていた。

当然、求職活動は困難を極めた。無収入の生活は即破綻。彼女の世話になることになった。それでも「奇跡」を信じる彼は気楽なもの。結婚さえ申し込んできたという。結局、連れ戻されるように北陸の実家に帰って行き、彼女もそれをきっかけにきれいさっぱり別れた。

「とほほ」な話したが、モルモン社会では、こういうことは少なくないだろうと思う。信仰を守るために現実からドロップしていくのだ。ドロップして行っても、それは信仰を試されているということになる。転落人生も勲章である。

。教団も教団である。信者に対して責任ある言動をすべきである。社会人として現実に即して、常識的な判断をするように教えを述べるべきである。そうしないと教団はともかく、信者の将来はない。

□ 高橋弘のモルモン人物伝 (11)
荒くれ男“ビル”こと、ビル・ヒックマン (1)

今春出版した『ユタ州とブリガム・ヤング』のなかで簡単にしか紹介できなかったモルモン教徒の「ならず者」「ギャング」の一人にビル・ヒックマンという男がいる(同書157～160頁)。教祖ジョセフ・スミスの頼りになるボディガードを勤め、その後大管長ブリガム・ヤングの忠実な部下として数々の事件に暗躍した人物である(数々の事件の一部は、医師ロビンソンや弁護士ハートレー殺害などで、同書巻末の年表にもそのほんの一部が記されている)。しかし、忠実なモルモン教徒とはいえず、ひとり人の置かれた状況、生き方は千差万別である。モルモン教会やその指導者との関係、考え方や立場もけっして一様ではなく、その特異な時代背景と多妻婚とか終末思想とか報復行動というモルモン教団の特殊な慣行ゆえに、そのなかで教団指導者に従って生きてきたひとり一人のたどった多彩な生涯はながく心に残るものである。これから数回にわたってビル・ヒックマンをやや詳しく紹介するまえに、あらかじめ彼の生涯を簡単に紹介しておきたい。

ビル・ヒックマンは西部フロンティアで生まれ、フロンティアで死んだ真の「マウンテン・マン」(大自然を相手に大自然のなかで生きた人間。教育よりも自分の知恵と勇気と腕力で生き抜いた自然児のこと。前世紀のアメリカ西部に生きた男たちの中にはそうした人間が少なくなかった)であった。モルモン教徒がミズーリで地域住民と摩擦をおこしミズーリ州知事リルバーン・ボッグズによって追放され、イリノイ州に遁走しそこにノーヴーというモルモンの開

クマンは教祖スミスによって直ちに「五十人評議会」に加えられ、スミスのボディガード長に任命されるなど、スミスの信頼を得た男であった。スミスの死後、ブリガム・ヤングの忠実な部下となり、ヤングの権力掌握とその後のユタへの大移動に力を貸し、ユタにモルモン王国を建設する際には、大管長ブリガム・ヤングの頼りになるボディガード、法の執行官となり、連邦軍やインディアン、よそ者にはモルモンの殺し屋、ならず者として暗躍した男である。ビル・ヒックマンには10人の妻と35人の子どもがいたから、その生活を支えるのは並大抵の苦勞ではなかったと思われる。ビル・ヒックマンはモルモン教団と大管長ヤングのための多大な犠牲をはらい、さらに自ら稼いだものを貢いでいた。大管長ブリガム・ヤングのために邪魔者を処理し、連邦軍と闘い、よそで奪った金や馬などの財産を惜しげもなく与えてヤングの資産増大に多大な寄与を果たしたにもかかわらず、ヤングはビル・ヒックマンにたいし殆んど見返りを与えなかった。そのことにヒックマンは少なからぬ憤りを感じていた。

1859年、ヒックマンは銃撃され大腿部を撃たれ瀕死の重傷を負ったが、強健な身体のおかげで死をまぬがれた。しかし傷は癒えたものの、普通に歩行ができなくなり、また乗馬するときなどには激痛が走るようになった。こうして不具となり大家族をかかえていたヒックマンにはなかなか仕事がなく貧困にあえぐようになった。また大腿部の痛みを紛らわすためウイスキーと麻薬を常用するようになっていった。

ユタに到着して13年目の1863年、生活苦にあえいでいたヒックマンは旧知の連邦軍大佐パトリック・コナーから月給150ドルの連邦インディアン局の仕事を提供される。しかし大管長ヤングはこれを快く思わず1000ドルと引き換えにその仕事を辞退するように命ずるが、ヒックマンはヤングの意に反してこの仕事を引き受けた。このことを境に、ヒックマンはモルモンの背教者、裏切り者、さらには「スパイ」とみなされるようになり、モルモン教団からさまざまな冷たい仕打ちを受け、命からがらユタから逃れてワイオミングに住み、そこで極貧のうちに不遇な一生を閉じたのであった。

その伝説的な人物像ゆえに、ユタ州周辺にはヒックマンの名前をつけられた丘、溪谷、泉などがいまだに散在している。

ヒックマンについての特筆すべき点は数点あるように思われる。一つは、マウンテンメドウズの虐殺事件の責任をとらされて処刑されたジョン・ディー・リーと同様、1871年、ヒックマンも自分の来し方を回想し、記憶の限りの事件や日々の思い出を手記にして残していることである。第二に、(この手記とともに)ヒックマンの証言によって大管長ヤング、副官長ダニエル・ウェルズ、判事ホゼア・スタウトなどのモルモン教会指導者の一連の殺人への関与が立証され、その逮捕・監禁につながったことである。

ヒックマンは1883年に68歳で亡くなったが、その手記はシンシナチ・コマーシャル紙の記者ビードル氏による序文を付されて1904年に出版され、ながく闇に葬られていたさまざまな事件が暴かれたことである。その本の題名はBrigham's Destroying Angel: Life, Confession, and Startling

Disclosures (『ブリガムの破壊の天使、その生涯と告白と数々の驚くべき暴露』)である。

1988年、ビル・ヒックマンの曾孫にあたるホープ・ヒルトンという女性が、曾祖父ヒックマンについての伝記を著わした。これはビル・ヒックマンの初めての伝記である。その中でヒルトンはこう述べている。この本を書いたのはヒックマンではなく別の人間ではないかという議論があるが、その筆致と他人にはうかがい知れない詳細な記述から、ヒックマン以外の人間が書いたとは到底思われぬ。私がこの伝記を書くときに注意したことは、ヒックマン以外の人間が加筆したかもしれない部分を特定し、それを排除することであった。

今回、ビル・ヒックマンを素描するにあたり主として用いたのは、ヒルトンの著した伝記と、ヒックマン自身の手になる手記である。他の研究書は参考程度に用いた。

ビル・ヒックマン〔正式名はウィリアム・A (アダムズ)・ヒックマン〕は、1815年4月16日、ケンタッキー州の粗末なログ・キャビン(材木を組み立てた小さな家)で生まれた。父はエドウィン・ヒックマン、母はエリザベス・アダムズの初子である。ウィリアムは普段は「ビル」と呼ばれていた。前大統領ビル・クリントンと同様、ビルはウィリアムの通称である。ウィリアムという名前は父方の祖父の名前をもらってつけられた。ヒックマン家は祖父ウィリアム・祖母レティスや伯母ローダが同居する大家族であった。母エリザベスは教養ある家庭の出身だが、父エドウィンは文盲であった。そこで子どもの教育は母の手にまかされた。

ビルが5歳になるころ家族はよりよい土地を目指してミズーリに転居した。ミズーリが州に昇格する2年前のことであった。落ち着いた先はチャーリントン郡(後のランドルフ郡)で、そのまま30年間そこで農業を営んだ。ビルはこうしたフロンティア(開拓前線)で育ったのである。ビル本人の記憶では、まだ16歳になる前にイノシシやピューマ(アメリカ・ライオン)や熊を一人で仕留めたことがあるという。ビルは身体のがっちりした屈強な青年へと成長していくのである。しかし性格は衝動的、直情的であり、この性格は終生変わらなかったと思われる。

父エドウィンは、やがてランドルフ郡の治安判事(1822-28)に任命され、生活が安定したようだ。家族はビルを医者にしたいと思い、ビルが16歳になったとき寄宿学校に入れたが長続きせず、つぎの法律も投げ出した。そこ

ルクハルト家（英語読みではパークハルト？）に下宿することになったが、その3歳年上の娘ベルネッタと恋に落ち、両方の親が反対するなか、ビル17歳、ベルネッタ20歳で駆け落ちをする。反対理由は、ブルクハルト家は家柄が異なるというもの、ヒックマン家はちゃんと教育を終えて欲しいというもの、だった。ビルはその後モルモン教の多妻婚の教えにしたがい9名の若い妻を迎え入れることになるが、ベルネッタは終生ビルの妻でありつづけた。

なぜベルネッタが3歳も年下のビルと結婚をする気になったのかは不明であるが、やや派手で衝動的ではあるものの、弱冠17際ながら馬に乗ったら誰よりも早く、銃を持たせると誰よりも早く撃てる青年に未来を託すに足るものを見出したに相違ない。

結婚した二人を両家はしぶしぶ承認せざるを得なかった。ビルは一時学校の教師の仕事に就くが性に合わず、父エドウィンが与えてくれた320エーカーの土地を開墾して農業を営んだ。1833年、ビルは妻ベルネッタの教会で洗礼をうけ、メソジストになった。ビルが18歳のことである。このことでビルは地域住民の信頼を得るようになった。

そのころモルモン教会はミズーリにシオン（神の都）建設を目指してモルモン教徒が結集していたが、深刻な地域住民と紛争が起こり、ミズーリ州知事リルバーン・ボッグズからモルモン教徒の撲滅令が出され、スミスなどの指導者は逮捕され、信徒たちはミズーリから追放の憂き目にあった。次々に通りがかる逃亡中の破けた靴をはきボロをまとって飢えたモルモン教徒がパンや馬への水を求めてきたとき、ビルはその辺の農民と異なり、彼らにパンを提供し、馬には水を与えた。ビルはこのモルモンの群れに大いに興味をもったのである。そして州知事ボッグズの撲滅令が出るにおよび、ぐずぐずしているとチャンスを見失うと考え、開墾した畑を安く弟に譲り、モルモン教徒のイリノイの開拓村を目指した。それは1838年10月のことで、ビルは23歳のことである。彼と妻のベルネッタは洗礼を受けてモルモン教徒になった。その頃にはすでにビルは頑丈な体つき6フィート（180センチ）の体格になっており、悪漢、ならず者という評判ができていたという。

1839年5月、ビルは逮捕監禁から遁走してきた教祖ジョセフ・スミスと始めて会った。ビルの評判を聞いていたのか、スミスは直ちにビル・ヒックマンをモルモン教会の秘密結社であるシャドウ・キャビネット「五十人評議会」のメンバーに加え、またホゼア・スタウト、オリン・ポーター・ロックウエル、ロット・スミスとともに教祖スミスのボディガードに抜擢された。ボディガードが全員純白の服を装って教祖スミスを警護する光景は傍目からも目立っていたという（『ユタ州とブリガム・ヤング』のなか「ヤングの殺し屋」158頁以降参照）。

その後、ビルはモルモンの村ノーヴー（イリノイ州）からミシシッピー川を挟んだ向かい側のアイオワのリー郡ナッシュビル（後のガーランド）に住居を構えた。そこにはすでに百家族のモルモン教徒が住んでいて、地域住民との面ぶるが持ち上がっていた。最大の問題は急激に数を増やすモルモン教徒が選挙で統一投票を行い、地域の政治を左右するようになったからである（『素顔のモルモン教』149頁以降を参照）。地域住民は反モルモン活動を展開し、モルモン教徒の追放を目指した。またモルモン教徒も反撃を行い、不穏な空気が漂っていた。こうした中ビル・ヒックマンは数々の窃盗（泥棒）事件で繰り返し逮捕される時間がおきている。また住民を脅迫した事件でも賠償金を支払うはめになっている。後日、荒くれ男ビルとして、殺し屋・ギャングとして恐れられたビルであるが、初期にはもっぱら泥棒として名を馳せていたことが伺われる。（次回に続く）

■ 連載 リアホナを斬る（第13回） 木塚灯八
2007年7月号 大管長会メッセージ 「隠れたくさびの危険性」

私が若かった頃、地元のモルモン教会指導者のなかに熱心で純真に信じている人がいました。当時モルモン教会の機関誌は「聖徒の道」という名前でサイズも今とは違っていました。その地元の指導者は当然ながら「聖徒の道」も良く読んでいて、なかでもモンソン長老の話が一番好きだと言っていました。とても感動すると言うのです。聖徒の道が届けられると真っ先にモンソン長老の話を読むのだそうです。そうなのかなと思いましたが、それ以来、私はモンソン長老の話には関心を払ってきました。それで分かったことなのですが、彼はいろいろな感動的な外部のエピソード、つまりモルモンとは無関係の人々の話を織り交ぜて説教を組み立てているのです。端的に言えば他人の感動的エピソードをパクっているのです。

さて今回の大管長会メッセージにはモンソン長老の説教が掲載されていますが、いきなりサミュエル・T・ホイットマンという作家の「忘れられたくさび」という教訓話を引用しています。それは次のような内容です。

そんなある日、〔その少年は〕きこりの使うくさびを見つけた。幅が広く、平らで重く、長さが30センチ以上もあり、鉄をたたいて伸ばしたものであった。〔きこり用のくさびは木を倒すのに用いられるもので、のこぎりで切った切り口にくさびを挟んでから、大きなハンマーでたたいて切り口を広げるのです。〕……すでに夕食の時間を過ぎていたので、少年はそのくさびを……父親が門のそばに植えた小さくなるみの木の枝の間に置いた。夕食のすぐ後か、次に通りがかったときにでも、そのくさびを小屋に持って行くつもりだった。

しなかった。少年が大人になるころには、〔くさびは〕枝に挟まれて幾らか固定されていた。少年が結婚して父親の農場を継ぐころには、枝の間にがっしりと固定されていた。脱穀を終えてその木の下で仲間と夕食を食べたときには、半分近くが幹に食い込んでいた。……そして、その冬、氷の混じった嵐がやって来たとき、くさびは完全に幹の内部に埋まってしまっていたのである。

冷え込みが強かったその冬の夜、……三つの大きな幹の一つが裂け、太い枝がすさまじい音を立てて地面に落ちた。残った部分もバランスを失い、裂けて地面に倒れた。嵐が去った後には、あの立派な木には、小枝一本残っていなかった。

(中略)

農夫は一目見て、木がなぜ倒れたのか理解した。くさびが幹の中まで食い込んでいたために、枝を支える力が弱っていたのである

問題が小さなうちに解決しないで放置しておく、いつの日か取り返しのつかないことになる、そんな教訓を学べる話です。さてモンソン長老はこの話に続けて、私たちの生活の中にも隠れたくさびが存在するのだと言って、一人の友人に関する出来事を紹介します。

それはレナードという人で、彼自身は教会員ではなかったが奥さんや子供は忠実な会員であり、彼は家族が教会の責任を果たせるように助け、誰からも好かれる人物だったそうです。モンソン長老はなぜ彼がバプテスマを受けないのか不思議でならなかったそうです。晩年レナードは健康が優れず他界するのですが、病床にあったときにモンソン長老と交わした最後の会話で、なぜ教会に入らなかったかを明らかにしました。

その理由とは、遠い昔レナードの一家が農場を手放さなければならなくなったとき、近所に住んでいた農夫の行為でした。その農夫は責任ある地位にいたモルモン教徒で、レナードの家族に農場の買取を申し出てきたのですが、すでにレナード一家が決めていた売り先よりも低い金額しか提示しませんでした。しかし農夫は「私たちは親友だろう？私に売ってくれたら大事に手入れするよ」と言うので、レナードの家族は収入が少なくなるけれども彼を信用し、農場を売ったのでした。

ところがその農夫はレナードの農場と近辺の土地を一まとめにして転売し、かなりの収益をあげました。こうして心の中に欺かれたのだという気持ちを持ったレナードは、決して教会には入らなかったのです。

さて私はここまでモンソン長老の話を読んで、非常に感銘を受けつつありました。これはモンソン長老が幹部として、教会員に常に正直、誠実であるべきことを説き、些細なことであっても会員の不誠実な態度が周囲の人々を傷つけることを自覚させようとしているのだと思ったからです。

……もしそうであったなら今回の「リアホナを斬る」は今までとは全く異なる趣の記事、モルモン幹部を見直した、みたいなことを書きたらと思います。本当にそうであったら良かったのですが現実は違っていました。モルモン幹部と言う人間の本性を見た思いがして暗澹とした気持になりました。

モンソン長老はこう言って説教を続けたのです。

彼はこの話を終えると、これで厄介な重荷がようやく取り払われ、造り主とお会いする用意ができたよ、と打ち明けてくれました。悲しいことに、隠れたくさびのせいでレナードは大きな祝福を得られなくなっていたのです。

なんと言うことか、モンソン長老はレナードにこそ非があったと言うのです。今際の際にレナードは今まで決して語らなかつた心の傷を、親友だからと信じてモンソン長老に明かしたのです。それには少しでもモルモン教会を良くして欲しいという願いや、妻子が会員であったことについての感謝もあったでしょう。しかしそうした人生最後の打ち明けを耳にして、モンソン長老が感じたことは、「レナードは大きな祝福を受けられなくなった」ことなのです。

生ける神の使徒の目には、レナードの心の中に隠れたくさびは見えても、それを生み出したものが何なのか見えなかったのです。レナードは農場を売った相手と、モンソン長老という二人のモルモン教徒を信じて裏切られたのです。

今月号の記事を読んでいてさすがに怒りが込み上げてくるのを禁じ得ませんでした。これは少なくとも実話だからです。こんなひどい話を読まされるくらいならモルモン幹部が思いつきで語る具にもつかないトンでも聖書解釈のほうがまだいくらかマシです。

もし悪魔と言う存在がいたとしても、このモンソン長老が語った言葉よりも酷いことを口することは出来ないだろうと思いました。

□ 思い出す 私と勇気と真実の会 (3) るう
スキャンダル？

インターネットの威力は強力で、森代表の人徳もあって、会は急速に人数を増やして行きました。特に東京では成長が顕著でした。何度か会合ももたれて相互に懇親も進めていました。その盛り上がりはそうとうなものだったようですが、とんでもない「はめはずし」もありました。

このことはスキャンダルとして、一部のモルモン教徒たちによって匿名BB Sや教会員専用のメーリングリストなどで面白おかしく喧伝されているようです。この際、可能な範囲で私から説明しておきましょう。

らしたのですが、奥さんが経済的な事情で、風俗関係で働いていたのです。その方が会の懇親の場（今で言うとOFF会でしょうか）で、会の幹部の方に「営業」をしたのです。その幹部氏も酒の勢いもあってか、彼女の「営業」に乗ってしまいました。ただ、それは一度にとどまらなかったそうですが、それが夫の知るところとなり、両者の間で大トラブルになってしまいました。幹部氏に言わせれば、単にそれを商売の相手をした。たまたま、それが知り合いの奥さんだったということ。「文句を言うなら、しっかり働いて家族を食わせろ」と言うものでした。確かに奥さんに食わせてもらっていて、その客に文句を言っても説得力がありませんでした。幹部氏もちょっと相手を選択すべきではありませんでした。腹の虫がおさまらないこのご主人、あろうことかこれをスキャンダルとして、こういうことが好きなモルモン教徒に脚色の上伝えたのでした。「ボンド君」や「局長」と言うハンドルネームにはご記憶のある方も多いと思います。

このご夫妻のその後ですが、奥様は活動を止められ、自然退会されました。しばらくして、このことが直接の原因かどうかは分かりませんが離婚されました。ご主人の方はしばらく残っておられましたが、後に会の再編を行った際に身を引いていただきました。

本来なら、直ちに相応の対応をすべきだったのですが、会のメンバーには特に意見もなく、問題意識を持つということもありませんでした。解決に乗り出そうという姿勢を持つものもいませんでした。

先号と本号の冒頭ではインターネットのメリットを述べました。しかし、すでにネットの限界を感じる自体が発生して来たのです。ネットでの情報交換は簡単で手取り早く済みます。しかし、話し合ったり交渉したりと言うのはやはり、顔と顔を突き合わせて、少なくとも肉声を交わさないといけないものがあります。また、会のメンバーはこうした人間関係が苦手な人が多かったのです。というか、これはカルトグループ脱会者共通の問題といえると思います。人間関係を構築するのが苦手、自主的に行動することが出来なくなっているという人が多いのです。だからこそカルトに入ってしまったともいえるのですが

。この無関心は、私らが初めて感じた活動の「壁」でした。そして、モルモン教もさることながら、この「壁」との格闘が私の難事になっていくのでした。

■ おしらせ

- 既にご承知のことと思いますが、高橋弘先生の新著「ユタ州とブリガム・ヤング」が出版されています。（新教出版社 2,300円）
今までの研究をまとめた労作で、非常に有益な内容です。是非、ご一読下さい。また、amazonのレビューにも感想の投稿をしてくださればと思います。
- 投稿記事募集
脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。文はプレーンテキストで作成ください。

★メールマガジンバックナンバーはこちら
<http://garyo.or.tv/mm/tusin.htm>

・ 発行者	るう@大喜多秀起
・ ホームページ	http://garyo.or.tv/
・ メールアドレス	ruu_hideki@sky.bbexcite.jp
